

# ガイダンスとカウンセリングの歴史的展開とその意味

## Historical Development of Guidance and Counseling and Implications for the Future<sup>1</sup>

ロジャー・オーブレイ

Roger F. Aubrey<sup>2</sup>

翻訳：遠藤 忠

Translated by Tadashi ENDO

### 訳者による概要

現代日本の学校教育において、生徒指導と進路指導は異なる校内業務として位置づけられているが、「人格形成に関わる究極的な目的において」両者は共通しているとともに、それぞれの指導過程においても密接な相互関係を持ちながら進められている実態がある。両者は日本の近代教育の発展過程において導入、生成されきたが、とりわけ第二次世界大戦後の教育改革の中でアメリカ教育の大きな影響のもとでその構造を形成してきた。

本論文は、20世紀初頭においてアメリカ合衆国で青少年児童労働者の福祉活動の一環として誕生した職業指導(vocational Guidance)が論文執筆時の1970年代半ばまでに辿った歴史を描くものである。職業指導は、学校に取り入れられ、生徒指導(Educational Guidance)を生み、心理学と結びつき技術的に洗練された。しかし、優れた技術としてのカウンセリングがガイダンスに取って代わったことによって、本来持っていた児童青少年の人格発達という目的をともしれば見失いがちな状況が生まれたことを批判的に論じている。

本文中“Guidance”とある場合、「職業指導」と「生徒指導」の両者を含むものとして「ガイダンス」と表記した。

キーワード：ガイダンス、職業指導、生徒指導、カウンセリング、アメリカ教育史

### はじめに

人間というものが見せる驚くべきそして時としてタイミングのよい発明の才というものに私は強い関心を持っている。難破船に乗り合わせ、救難ボートがもうないという状況に遭遇しても、たまたまグランドピアノの大屋根の板が漂ってきたら、誰でもそれを素敵な救命具にしてしまうだろう。もっとも適切な救命具がピアノの屋根板だというわけでないのは当たり前なことだ。

ガイダンスは19世紀の産業革命が引き起こした大きな変動と混乱に対応する動きの

一つとして20世紀初頭に登場した。当時取り組まれた他の改革と同様、ガイダンスは何十万人もの人びとに襲いかかった状況に触発されたものであった。文明の歴史の中でこのときほど多くの人々がこれまで馴染んできた生活からこれほど急速に引き離され、見知らぬ環境に連れてこられたことはなかったし、歴史上このときほど技術的变化によって昔からの伝統的技術や習慣がバラバラに引き裂かれたことはなかった。

自給自足的な農村的な社会から大規模な大量生産に依存する国家社会への突然の切り替えは滑らかな移行期間など露ほどもないものであった。それどころか、19世紀の半ば以降の時代を特徴付ける出来事をあげれば、南北戦争による荒廃、経済不況、アメリカン・フロンティアの消滅、大都市圏の止めどない成長、教育も技術も持たない移民たちの大群、凋落期のスペイン帝国との戦争、ビジネスと勤労による個人資産の止めどない拡張、通信と交通の思いがけない急激な変化、経済的社会的な自立条件を何ら与えることなしに行われた何百万人もの奴隷の法的解放、既成宗教に対する社会的生物学的ダーウィニズムからの攻撃、義務教育法の急速な広がり、就職機会の大都市への集中、法人企業の拡張に対応する州や連邦政府の成長、基本的人権を求める女性たちの闘争、連邦の多くの地域で人々をたぶらかす恥知らずな行商人や起業家たちが跳梁跋扈したことなどである。

## 1 工業都市におけるガイダンスの始まり：1898 - 1910

ガイダンスが生まれたのは合衆国の中西部と東部沿岸地帯の大工業の中心地であったが、それは偶然ではない。シカゴやデトロイト、ボストン、ニューヨークのような都市にやってきたのは、移民や職を失った農民、北部の富を求める南部人たち、働き口を求めるマイノリティそして田舎や小さな町の生活に飽き飽きした若者たちであった。希望を抱いてやってきたものも絶望から逃れてきたものたちもいたが、皆がみな捨ててきたものよりましな生活を探し求めている。

残念なことに、彼らが引き寄せられた大都会では「素晴らしい生活」はめったにみつからなかった。おそらく、大都会では彼らの生活はさらに惨めにさらに危険なものであったろう。手に入る住まいは高価で、狭く、不潔で、絶えず火災の危険におびえなければならないものだった。社会や娯楽の機会はほとんどない上に、都会での生活は個々人の稼ぐ力を過大評価し、大家族を破壊したのである。結局のところ、都会に住む人々の雇用は、鉱山や大小さまざまな工場や鉄道での未熟練労働にほとんど制限されていたのである。これらの労働の大半は屈辱的で危険なものであり、この苦役が生み出す富は少数のもの手に握られるのに対して、「これら成果を可能にした労働の主体である人間は、社会の荒波の中で瞬く間に身も心もボロボロにされ、命まで奪われてしまうのである」(Mumford1961,p.446)。

大規模な技術革新によってもたらされたこのような不正や苦難がガイダンス初期の運命をかたち作ったのである。この新しい職業の先駆者たちは基本的に理想主義的で献身

的な改革者の隊列からやってきたのである。彼らの主要な救済対象は子どもや若者たちであり、学校がこの社会の病を治す拠点として選ばれたのである。結局、この時代の倫理的経済的問題は学校以外のどこに焦点を当てることができたのだろうか。「劣悪な条件で賃金の稼ぎ手になるために公立学校を中退する数多くの児童労働者たち」が保護されないとすれば、一体誰が保護されるべきだったのだろうか (Miller 1964,p.7)。

## 2 進歩主義的改革運動からガイダンスが与えられたもの

20世紀初頭のアメリカにおいて、職業指導がもっとも深い影響を与えた施設は学校であった。職業指導は当初、他の教科と同じように学校に導入された。それはクラスルームで大勢の少年少女たちに対して教師が教えることができるものと考えられた。さらに、職業指導は多くの場合既存のカリキュラムをその重要部分を強調することによって補う一連の学習経験と見なされ、それゆえ軽視され、無視されるようになった。

教育史家たちは、ガイダンスを正規の教育課程として最初にカリキュラム化を試みたのはジェッシー B. デイヴィス Jesse B. Davis だとしている (Bruwer1942, Miller1961)。1898～1907年にかけて勃興しつつある工業都市デトロイトの学校経営者としてデイヴィスは生徒たちの就職問題や社会的な問題に悩まされていた。こうした問題に対する関心は1907年ミシガン州グランドラピッズの校長職に招かれたときにも抱かれ続け、校長就任後、彼は職業指導をカリキュラムの中に新設したのである。

デイヴィスは作文の時間を週1回、彼が名付けたところの「職業と道徳指導」の時間とした。彼のこの着想はすばらしいアイデアであった。デイヴィスにとっては、この時のガイダンスの意味とその目的は、「生徒たちが自らの個性をよりよく理解することであった。すなわち、自らを導く道徳的意識を目覚めさせれば、かつて生きていた善良で偉大な人々の良さを自ら見習うようになり、将来どんな職業に就くにせよ自分を社会的な存在と理解し、その結果、自らの生き方や仕事仲間や隣人に対する責任感ひいては順法精神も身につくだろう」(1914,p.17)ということであった。

ジェッシー・デイヴィスの著作と仕事は野心的で情熱にあふれる改革者らしいものであった。彼をよりよく理解するためには、職業指導という狭い枠組みではなく、ホレースマンが始めジョン・デューイとその信奉者たちの進歩主義教育協会が完成させたアメリカ教育における進歩主義という、より広い視野で捉えなければならない。教育は人道主義者たちが当時選んだいくつかの改革目標の一つに過ぎなかった。アメリカ教育の進歩主義は「広い文脈を持つアメリカ進歩主義の一部分にすぎないものであり、要するに進歩主義的教育は教育における進歩主義運動として始まったのであり、学校を利用して個人の生活を改善する多面的な努力のことなのである」(Cremin,1961,p.viii)。

ローレンス・クレミンは別の箇所でスクールカウンセラーを「進歩主義運動の生んだもっとも典型的な子ども」(1965,p.5)として描いた。このような賛辞は真実というより象

徹的なものである。それはカウンセラーがつくりだしたものではなく、進歩主義運動家たちの視野に入るように描き出されたものである。ガイダンスがアメリカの進歩主義運動の目的と理想を体現するものであり得るという信念は、その初期に広く共有され、ジョン・ブリューワー John Bruwer の『ガイダンスとしての教育』が出版された1932年に頂点に達した。ブリューワーにしてみれば、ガイダンスが既存のカリキュラムと学校制度の中に全面的に取り込まれるということそのものがまさに新しい専門領域にとって完璧なゴールだったのである。しかしながら、第二次世界大戦とその後の時期においては、進歩主義教育協会が衰亡し消え去っていったように、ブリューワー流のガイダンス運動家たちも同じ運命をたどるのであった。

### 3 アメリカ教育における職業指導の登場

中西部の工業地帯でジェッシー・デイヴィスが先駆的な仕事をしていたときと同じ時期に、もう一人のガイダンスのパイオニアが東部沿岸地帯の工業地域に登場した。フランク・パーソンズ Frank Parsons はしばしばガイダンスの父と呼ばれるが、そのキャリアは公立学校で始められたのではない。パーソンズは、シカゴのジェイン・アダムズの慈善活動のあり方に強く影響を受けてボストンでソーシャル・ワーカーとして仕事を始めたのだ。その影響は、勤労青年及び職を求めている若者たちのためにボストンにセツメント・ハウスを設立した彼の仕事ぶりに現れている。

パーソンズの初期の活動は学校から離れた若者たちに絞られているが、彼の望みはいつか職業指導が「すべての町で公立学校制度の一部となる」ことであった (Lasch 1965, p.157)。この目的を達成するためにパーソンズは1908年ボストン市役所に職業幹旋課 Vocation Bureau を設立した。職業幹旋課の設置は重要な突破口となった。というのもそれは最初の「職業指導の制度化」を意味するからである (Ginzberg 1971, p.23)。一年後、パーソンズの著書『職業選択』(1909)がその死後に出版された<sup>3)</sup>。1910年ボストンが第1回職業指導会議の場として選ばれたとき、ガイダンスに対するパーソンズの貢献が世に認められることになった。この会議開催をきっかけとしてのちに1913年ミシガン州グランドラピッズに全米職業指導協会 National Vocational Guidance Association が置かれることなるのである。ジェッシー・デイヴィスとフランク・パーソンズの先駆的業績に共通するものは明らかであり、彼らの仕事は1915年にのちにNVGA誌となる職業指導会報 the Vocational Guidance Bulletin の第1号の発行につながったのである。

職業指導は20世紀初頭のアメリカの大都市で始まった。デイヴィスとパーソンズの仕事は社会改革や若者に対する際限のない搾取に対して同じような関心を持つ多くの人々に受け継がれた。1906年にはすでに職業指導は『キャリア選択』という小冊子を書いたイーライ・ウィーヴァー Eli Weaver という学校長によってニューヨークの学校に導入されていた。職業指導のゆっくりだが着実な成長は、1909年にボストン、1911年にシンシナティ、

1912年にグランドラピッツ、1914年にデイモンとそれぞれの学校に取り入れられたことによってその足跡を記している (Good1956,p.446)。1910年までに合衆国の37市の学校で職業指導カリキュラムが実施されている (Edwards & Richey1947,p.752)。ちなみに、大学における職業に関する最初の授業科目は1911年に職業指導課でのパーソンズの後継者であるメイヤー・ブルームフィールドMeyer Bloomfield によって担当されている。

しかしながら、学校における職業指導を推進することは厳しい戦いであった。1937年になってもまだ、教育問題諮問委員会Advisory Committee on Education は、「全米で10万人以上の人口を持つ市の少なくとも半数は公立学校で職業指導課程を持っていない」 (Advisory Committee 1938, p.112)。それにもかかわらず、今世紀の最初の20年間にわたって多くの勢力が職業指導に対する無関心と抵抗に対処するために力を合わせたのである。

疑いもなく、20世紀初めの職業指導に対するもっとも大きな支援の力は社会改革運動から与えられたものであった。この運動と職業指導との間の協力関係は、人間への搾取と虐待の激化に対して固く結ばれたのであった。この協力関係が中心に据えて戦ったものは、経済的な浪費と人間的な苦痛の問題であり、これらの問題に対して社会の良心、とりわけ法律制定者である議員の良心を刺激する戦術を繰り返し行った。明らかに社会改革者の隊列からはずれている立法者たちは社会改革者の執拗でやむことのない叫び声に応えるよう強いられたのであった。結局、議会は1917年に中等学校の職業教育と教員研修にとって記念碑的なスミス・ヒューズ法Smith-Hughes Actを採択したのであった。職業指導に正当性を与える法制化が開始されると、それは次の20年間の一連の法制化の動きによって強化された。すなわち、1929年にジョージ・リード法George-Reed Act、1934年にジョージ・エルゼイ法George-Ellzey Act、1936年にジョージ・デーデン法George-Deen Actが制定を見た。これらはいずれも高い効率を上げうる正当な事業としての職業指導<sup>4)</sup>に対し補助金とその他の支援を組み合わせるものであった。

#### 4 産業化の多様な展開と新しい教育要求

社会改革運動と啓蒙的な連邦法制との支援に加えて、職業指導は産業化の新しい展開の中で刺激を与えられた。商業と産業の成長につれこのような影響関係はますます複雑なものになっていった。このような複雑さが増すにつれより知的で多様な労働力が求められ、学校とそこで教えられている一般的なカリキュラムに対して強い関心が向けられるようになるのである。より有能で高度な技能を持つ労働者に対する要求が強まれば、学校はそれに対して何をすることができるのだろうか(スプートニック・ショックの影！)。

学校が行いうる反応の一つは修学期間の延長である。しかしながら、このような対応は学校関係者の側の積極的あるいは意識的な反応としては現れなかった。修学期間の延長は、児童労働新法によって、この国に新たにやってきた大勢の移民たちの基礎教育を行うために、より高い収入を目指して、労働組合の要求に押されて、公教育資金の大幅

増によって、そしてより高度な教育をもつ労働者に対する商業や産業のニーズによって生み出されたのである。

公教育学校に通う児童生徒が増えるにつれ、学校では長年にわたって培われてきた習慣や伝統を変えていかなければならなかった。学校は、異質な子どもたちが突然大量に現れることによって溢れかえり、既存の組織形態や教育内容は不適切なものとなった。新しい児童生徒集団を受け入れ、彼らに初等教育以上の大衆教育を施さねばならないことは教員たちを戸惑わせたり抵抗の動きを引き起こさせたりした。

1900年代初頭の公立学校の教員たちは大衆教育を処理する態勢ができていなかったが、職業指導の創始者たちは逆境にもたじろがなかった。実際、初期の職業指導運動の長所は、主要な関心を個人とその生活を流動的で常に変化しつつある環境に準備することに向けていたことである。このような考え方がユニークでも近年のものでもないことは1915年にハリー・キットソンHarry D.Kitson の以下の引用文に明らかである。職業指導にとって役に立ちそうな理論を検討するに当たって、キットソンはそうした理論が何であれ必ず考慮しなければならないことは、「個人は社会環境にはめ込まれて順応しきることができるものでもないし、社会は決まりきった役割を演ずる人々でつくられているものでもない。個人も社会も常にダイナミックな相互作用のもとにあり、人間の知性では予測できないさまざまな変化が不可避的に生ずるものなのである」(p.107)。

## 5 理論と哲学を求める職業指導

初期の職業指導運動には哲学的、心理学的基礎が欠けていた。パーソンズたちの職業選択モデルはシンプルな論理と常識的な感覚に基づくものであり、主に観察やその他のデータ収集技術に依存するものであった。それゆえこのモデルが公立学校に導入される際の論拠は、学校の外にある経済的人道的な状況に基づくものであって、教育固有の特質に関わるものではなかった。ジェッシー・デイヴィスとその他若干の人々を例外とすれば、職業指導は教育方法に関わるものでもないし、何年にもわたる期間を通して個人の発達に資する手段と見なされるものでもなかった。職業選択と個人としての発達の間のこの重要な結びつきは長いこと埋められることなく、しばらくしてスーパー E.Super Donald、ギンズバーグ E.Ginzberg、ロウ A.Roe、ティーデマンDavid V. Tiedeman などのような人々の研究によってようやく両者の結びつきが明らかにされるようになったのである。

職業指導が登場してからの最初の数年の間には強力な哲学的あるいは心理学的支えが欠けていたが、この隙間は計量心理学を利用した職業指導が影響力を増すことによって速やかに埋められていった。職業指導と計量心理学の両者の結びつきが深まるにつれ、職業指導はテストと個々の生徒の心理的分析に頼るだけになっていった。ギンズバーグの言葉(1971)を借りれば、「職業指導は始めはテストの魅力にとりつかれ、ついにはテ

スト中毒症になった」(p.30)。この「中毒症」は、第一次世界大戦直後から少なくとも20年間、職業指導に取り憑いたのである。

## 6 初期の職業指導を支えた計量心理学

職業指導が計量心理学という基礎理論がなかったとしても生き残ったであろうことは疑いない。1915年以前でも職業指導の先駆者たちは自分の仕事を、社会のゆがみを告発し、求職者に適切な仕事を見つけるという役割に置いていた。しかし、その役割は、働きたいものの能力とともに彼らの興味や心身の耐久力そして限界について見定める助言者の能力に依存している。こうした情報を念頭に置いて求職者はさまざまな仕事について自ら検討し、しかる後さまざまな仕事とその選択について分析的に助言者と話し合うのである。まずはじめに個人を客観的に評価する科学的手段がなければ、職業指導が幅広く受け入れられることはなかったであろう。

テスト方式や後年採用した特性因子心理学によって職業指導運動は、社会的諸制度の中でしっかりとした地位や足場を築き上げたのである。しかしながら、新技術の導入によって、職業指導はその基礎としてのテストやその他の情報に過度に依存するという代償を払っているのではないだろうか。逆に言えば、診断-情報-配置というパーソンズの定式に過度に依存することによって、個人の人生の全体を飲み込みかねない職業指導というプロセスを単純化し、効果を上げているのかもしれない。さらに言えば、社会階級、動機、民族、価値観、長期的発達過程などを研究対象にしている行動科学の諸分野が明らかにしている知見について、職業指導が目を向けないのはテスト理論のせいである。

職業指導は、20世紀初頭に多くの新しい動きの一つとしてアメリカに登場した。はじめは継子のようにおずおずと遠慮がちに進み出てきたのであった。それゆえ、個人差と人間的欲求に対する大量生産社会の冷淡な反応に着目したこの運動がパーソンズのプラグマティックなモデルを採用し、さらにそれを測定心理学や特性因子理論によって強化したのは驚くに当たらない。残念ながら、職業指導が採用した手段の多くは彼ら先駆者たちが望んだ願いを叶えるものではなかった。もしそれらの手段の中に何かがあるとすれば、偉大な自己決定と人間的な尊厳を勝ち取れるよう人々を支えるものではなく、厳密なラベリング、分類、カテゴリイズ、区分といったものによって人々を助けようとしてかえって駄目になっているのである。

職業指導運動の最初の30年間、カウンセリングについてほとんど言及がなされていないのは注目するに及ばない。実際、1931年にプロクター Proctor、ベネフィールド Benefield、レンWrennによって『職業指導ワークブック』が発行されるまで、心理学的手法としてのカウンセリング概念が明らかにされ、またそれに対する批判が公にされることはなかった。職業指導の成長期においてこのような方法を用いることができなかつたことが、計量心理学を用いた職業斡旋が当初人々を魅了した理由の一端である。人間

の多様な欲求に対して適切に対応することができる方法がなかったので、職業指導は単次元の限定的な活動領域で仕事をしたのである。

## 7 職業指導におけるカウンセリング利用の始まり

職業指導が始められてからほぼ30年後にカウンセリングが正式に認知されたが、それは長年待望されていたものだった。パーソンズ(1909)やブルームフィールド(1915)、キットソン(1915)の著作の中にもものにカウンセリングと呼ばれるものを感じさせるアイデアを見ることができる。さらに言えば心理学的手法としてのカウンセリングは、初期の精神衛生運動の遺産や、スタンレイ・ホール及びその児童研究運動の後継者たちの著作、1909年クラーク大学でのフロイドの講演をきっかけにしてアメリカに導入された精神分析の中に、さらには第一次世界大戦後の計量心理学を応用した試みの中にも、その影を見ることができる。

カウンセリングの始まりは既存の職業指導という仕組みに強く限定されたものであった。従って、カウンセリングは職業指導上の一定の成果を導き出す単なる補助的技法としてのみ見なされたものである。初期におけるこの手法は特性因子カウンセリングと名付けられていた。ウィリアムソン(1965)のようなカウンセリングの提唱は、そのルーツをフランスやドイツの能力心理学の考え方や、アメリカの産業心理学や応用心理学を創始したドイツ人心理学者ヒューゴ・ミュンスターバークHugo Munsterberg(1913)の研究に求めることができるとしている。

特性因子カウンセリングの初期の実践は、単純なもので基本的にワンステップ・オペレーションであった。パーソンズの三段階モデル、とりわけ最後の第三段階<sup>5</sup>の効果を高めるためにカウンセリングが用いられたのである。かつて計量心理学がパーソンズの三段階モデルの第一段階である診断に厳密性と威厳を与えるために採用されたが、カウンセリングは個人に適切な職を見つける最終段階で用いられたのである。そのような経過をたどるうちにテストとカウンセリングという技法は職業指導に科学的雰囲気をもたらしたようである。計量心理学とカウンセリングなどの経験的心理学が進歩するにつれ、その妥当性と予測能力は高められてきた。そのような流れの中で「ほぼ第二次世界大戦の開始から終了までの間、職業指導のアカデミックな装い」(Ginzberg 1971)に威厳を与えたのはこの二つの技法の組み合わせであった。

特性因子的アプローチから発展したカウンセリングモデルはそのうち指示的ないしはカカウンセラー中心モデルと呼ばれるようになった。このモデルは野心的な職業指導運動が持っていた正確さや明確さを反映し、カウンセラーの役割を教師に似たものとして設定していた。カウンセラーは来談者よりはるかに成熟しており、さらに来談者にとって役立つ技術や知識を持つものとされていた。その結果、カウンセラーはカウンセリング・プロセスにおける主導者であって、来談者の助けになるような地点や方向に彼らを導く



責任を持つものとされていた。

振り返ってみれば、特性因子カウンセリングは過度に指示的で、厳格で、視野の狭いものであると批判するのはたやすい。しかしながら、このようなアプローチは歴史上極めて高度な厳格さと権威主義によって特徴付けられる時代の中で生じたことなのだ。このようなことは、1930年から40年代初めにかけての時代とアメリカの全国的な状況の中でつくられたことなのである。1930年代はアメリカもそして世界のほとんどの国も例外なしに失業と貧困に膝を屈していた時代であり、1940年代はじめ第二次世界大戦という代償によってようやく改善が図られたのであった。第二次世界大戦後の10年間の不況は初期の職業選択理論に対する厳しい試練となった。初期の理論に対するもう一つの試練となったものは、1900年から1958年にかけてのアメリカ合衆国におけるおよそ九千七百万人の人口増加とこの間に労働人口が2倍となったことによって生じた諸状況に適用可能であるか否かという問題であった (Norris,Zeran&Hatch 1960,p.33)。結局、職業指導は無償公教育の機会と労働市場に参入する女性労働者の数の劇的な増加に対応しなければならなかったのである。総じて言えば、これらの変化は圧倒的な勢いをもち、初期のパーソンズモデルの守備範囲で時代の要求に応えるにはあまりにも力不足であった。

## 8 初期のカウンセリング技法の消滅

かつて優勢であったカウンセリングにおける特性因子的アプローチは1940年代初めには陰りを見せ始め、その後の十年間で衰勢は決定的になった。古いカウンセリングの凋落は、不況と第二次世界大戦そしてより完全な個人の自由と自己決定を求める欲求の高まりの中でわが国に生まれた新しい精神ともある部分でつながっていた。そのような動きは、戦後の好景気や完全雇用状態、復員兵援護法によって退役軍人たちに提供された支援策、それまで退けられていた人々に対する全般的教育機会の拡張などによって促進された。伝統的な職業指導はこのような広範な必要性には対応しない。それに対して新興分野であるカウンセリング心理学はこれまで通りの職業分野での援助を提供するだけでなく、「それらを超えてあらゆるタイプの生活適応問題について、援助を与えるものも与えられるものも一人の人間として問題に対処するのである。その基礎にある原則は、解決すべき問題は職業的であれ、夫婦問題であれ、個人的な問題であれ、そのような個別問題を超えて、援助を必要とするもの自身がみずから問題解決するということである」 (Super 1955,p.6)。

第二次世界大戦後に優勢であったカウンセリング・アプローチを決定づけるものとしての個人の自由の問題は、アーマー Armor(1969)がその古典的なカウンセリング研究の中で提起したものであった。アーマーは次のような刺激的な問いを投げかけている。すなわち、ここ数十年の間、高い需要に支えられて急速に成長してきた諸産業にとっての

最善の利益を守るために、カウンセラーは労働者と職業の正しいマッチングのための方法論において権威主義的に振る舞ってきたのであろうか、と。アメリカ全体にとっての最善の利益を守ろうとする情熱をもってアーマーが考えたことは、「カウンセラーの役割が、民主主義にとって重要な意義をもち、そこから生まれたものであるなら、疑いもなくカウンセラーは自由の原則に立つと宣誓すべきである。もしこのカウンセリングの前提が基本的に反民主主義的であるならカウンセリングが自由を強調しなければならないということは成り立つのだろうか。」(p.45)

初期のカウンセリング・モデルのこの問題点は、1930年代末に多くの臨床心理学や社会心理学、サイコセラピーの専門家たちから鋭い指摘を浴びた (Allport 1937; Freud 1937; Horney 1937; Kardiner 1939; Murray 1938; Sheruf 1936; Warner 1937)。ちなみに、この分野での突破口は第二次世界大戦のさなかに開かれ、その結果大学でのカリキュラムやカウンセラー養成に責任を持つ人々の訓練が改革された。カウンセリングの実践に結びついたモデルや技法の姿が劇的に変化したのであった。

## 9 カウンセリングにおけるカール・ロジャースの革命的衝撃

もし、自由と自己決定が1940年代におけるガイダンスとカウンセリングの方向転換の主要な要因であるとするならば、その最大の原動力はカール・ロジャース Carl Rogers である。

疑いもなく、1940年代後半のカウンセリング運動全体の進路と方向を変えた重要人物はロジャースである (1939,1951,1954,1961)。ロジャース・グループの活動の最終的な衝撃が極めて包括的かつ明瞭であったので、スーパー (1964)にはその影響がガイダンスという職業全体に敵対するものと感じられた。スーパーにとってその当時の職業指導理論は、ロジャースの理論と研究を消化吸収するにはあまりにも無力なものだった。とはいえ、スーパーにとっての職業指導理論は「ロジャース理論のような新しいものに置き換えられるのではなく、新たに見いだされた事実を照らして素晴らしいアイデアを取り込み自らを改造し得るよう発展してゆくべきである」(p.156) と考えられたのだった。

このような批判にも拘わらず、ロジャースの革命的なアプローチが巻き起こした大流行によって、来談者中心カウンセリングは1950年代に広く普及してゆくのである。その影響の広がりには、主要なガイダンス機能を担うものがテストからカウンセリングへと突然置き換えられたことで十分示されるであろう。その後数年にわたって、カウンセリングは名声を上げたので、カウンセラーの時間の使い方やカウンセリングとガイダンスの全般的な目的についてガイダンスと張り合うようになったのである。ガイダンスの補助的技法として始まったものが今や自らの生存権を主張するかのようである。

ロジャース流のカウンセリングと他のカウンセリング・アプローチがカウンセラーの要件として実践に入り込んでくるにつれ、ガイダンスがかつて持っていたある特性が破壊され、失われるようになった。ガイダンスが崩壊した主な原因は、「学生や来談者の

情動的、感情的要素に焦点を当てすぎたことによって、カウンセラーは教育におけるこの新しい専門についてほとんど表現不能な、あるいは少なくとも理解できない役割をつくり上げようとしていたのである。実際、どのような働きで何をもたらすのか明確であることが求められているはずだが、来談者中心を信念とする教師やカウンセラー、サイコセラピストたちが自己実現という共通目的の下で象徴的に結びつけられているように、その役割はわざとのようにほんやりと曖昧化されたのである」とスプリントホール Sprinthall.N.A.(1971)は記している(p.68)。

カウンセラーという専門分野に対するカール・ロジャースの影響を過小評価してはいけない。とりわけ、カウンリングとガイダンスに関する実践に関わる著作活動はドラマチックな変化をひきおこした。ロジャースが現れるまでのこの種の文献はとても実際の性格のもので、テストの作成・実施、生徒の成績の累積記録の作成、オリエンテーションの手順とか職業紹介などの事柄を扱うものであった。さらに、初期の文献はガイダンスの諸目標を広く扱うものであった。ロジャースの登場とともに突然の変化が起こった。カウンセリングとその研究の技術と方法、カウンセリングの改良、カウンセラーの養成と選抜、カウンセリングの目的・目標が強調されるようになった。ガイダンスというガイダンスはほとんどの文献から主たるテーマではなくなり、カウンセリングに対する桁違いの関心の高まりに置き換えられたのであった。

## 10 1950年代：大々的な躍進と拡大

1950年代に起きたガイダンスに対する関心の低下のすべてがカウンセリングに置き換えられたのではなかった。発達心理学や学習理論、精神医学それに社会学 (Erikson 1950; Havighurst 1952; Hollingshead 1949; Inhelder & Piaget 1958; Lynd & Lynd 1954; Piaget 1952; Riesman 1950; Sullivan 1953; Warner, Meeker & Ells 1949; White 1953) が、ガイダンスの理論と哲学における意義深い進歩の道を開いたのである。スーパーの先駆的な仕事 (1953, 1955, 1956) によって、職業指導はキャリア開発 career development へと姿を変えることになった。この劇的な変化は自己概念理論 (Combs & Snygg 1949) の登場によって強化され、いくつかのキャリア開発理論 (Bordin, Nachman & Segal 1963; Ginzberg et al. 1951; Holland 1959; Roe 1956) によってさらに前進せしめられた。

1950年代初期、ガイダンスとカウンセリングの分野がその職域と目的を拡大するにつれ、カウンセラーの多様な関心を統合する専門職組織の必要性が明らかになった。初期の組織として18年間存続したガイダンス・人事団体協議会 Council of Guidance and Personnel Associations という組織は、活動する諸団体をガイダンスという枠組みのもとで統合することに失敗した。その結果、1952年7月、ガイダンス監督官・カウンセラー養成師協会 (ACES) とアメリカ大学人事協会、全米職業指導協会という既存の団体の合併によりアメリカ人事・ガイダンス協会 American Personnel and Guidance Association が結成

された。

もし、カウンセラーにとって歴史上最も重大な意義をもつ10年を選ばねばならないとしたら、それは1950年代ということになるだろう。この10年は、理論、研究、実践、専門職団体において新時代への重要な入り口を切り開いただけではなく、カウンセラーの未来を形成する全国的かつ全世界的な出来事が起こった10年でもあった。特に、1958年のロシアのスプートニク1号<sup>6</sup>の発射に対するアメリカ国民の反応に引き続いて、ガイダンスとカウンセリングにおける重大な変化が起こったのである。スプートニク1号事件は、アメリカの学校に関するコナント報告書(1959)とあいまって1958年の国防教育法National Defense Education Actの成立をもたらした。数年のうちに、学校に配置されたカウンセラーの数は4倍に増やされ、カウンセラーの生徒数に対する比率は1958/59年度の1対960から、1966/67年度には1対450に増加した (Shertzner & Stone 1971, p.120)。カウンセラーの養成を行う大学や訓練士の数もこの間にすさまじい増加を示すのであった。

## 11 1960年代:すべての人にガイダンスとカウンセリングをという約束

1960年代に入った時、ガイダンスとカウンセリングの未来は輝いていた。活動しているカウンセラーと養成中のカウンセラーの数が急速に増えたことによって、多くの人々は、ガイダンスとカウンセリングがすべての人に利用できる時代が来たのだと思うようになった。さらに、自己概念論や人生を一連の里程碑の連なりと見る段階論者たちその他多くの類似の論者たちが参入してきたことによって、その支持者とこの職業の将来展望は広がった。こうした信念は、アメリカ人事・ガイダンス協会APGA<sup>7</sup>の出資による『変容する世界におけるカウンセリング』の出版によってはっきりと表明されている。本書の出版に際して、ギルバート・レンGilbert Wrenn(1962)は「学生をカウンセリングする際の最も重要なポイントは、少数の学生の治療的ニーズや危機的場面に置かれるというよりはむしろ、すべての学生の発達のニーズと人生全体にわたる決断場面に置かれるのだ」(p.109)と主張し、多くの主要なガイダンスの特徴となる基本的精神の一つを表現した。

'60年代初めには、ガイダンス・カウンセリング計画がアメリカ人の大部分にとって利用可能となる歴史的時代が到来しつつあるとの新しい希望が、他分野の多くの研究者たちによって支持されていた。特に、教育学、心理学、社会学、人類学、そして経済学の分野の研究者たちは、教育や行動科学における既成の実践に対する厳しい疑問を通してカウンセラーの仕事を力強く後押しした (Allinsmith & Goethals 1962; Allport 1960; Arendt 1961; Bloom 1964; Bruner 1960; Coleman 1962; Conant 1961; Davis 1960; Erikson 1959; Gardner 1961; Goodman 1960; Harrington 1962; Hunt 1961; Kohlberg 1963; Maslow 1968; McClelland 1961; Peck&Havighurst 1960; White 1960; Wylie 1961)。すると、その再公式化は、個人の全体的発達と、この発達がシステムティックな形態での人間的介入

によってどのように促進されるのかについてに関心を強めた。

ガイダンスとカウンセリングに向けられた行動科学等の広範な学問分野の可能性は、1960年代には十分利用されることはなかった。社会科学及び行動科学における信頼できる認識論的基礎に接する機会は、まことに限られた形でしか享受されていなかったのだ(Katz 1969; Kehas 1966)。当時この職業が必要としていたものは、カウンセラーと自称する人々の多様な集団を一つにするための統合的な原則と共通の目的であった。

## 12 アイデンティティと指示性の問題

1960年代のガイダンスとカウンセリングは、多くの深刻な課題や難問に直面していた。その一つは支持者たちの問題である。つまり、この仕事に携わるものはもっぱら個人の正常な発達に関わるべきか、あるいは、少数だがより現実性をもつ人々を相手にするべきかということである。表面的には、この矛盾は明確であり、解決可能なように見えた。しかし、1960年代に起こった出来事がこの単純な対立を曖昧なものにしたように思われる。すなわち、マイノリティ・グループやベトナム戦争反対者たちが、ヒッピーや若者運動、ドラッグ文化の実験家やリーダー、夢を失った高校生や大学生、都市や田舎の貧困層や権利を求める女性たちと連合し、そのことによってガイダンスとカウンセリングの支持者たちが突如として激増したのである。

この時期のガイダンスとカウンセリングが直面した第二の問題は方法論に関するものである。カール・ロジャースで始まったガイダンスとカウンセリングの分野は、精神医学から臨床心理学、精神分析、学習理論、聖職者のカウンセリングのような多様な分野にわたるカウンセリングの大勢の支持者に開かれた領域である。これらのアプローチの支持者たちは、まとめて、カウンセラーに道具やテクニックなどの豊かな鉱脈を提供した。とはいえ、全体として、これらはガイダンスとカウンセリングの本質やカウンセラーの目的に何ものかをほとんど付け加えることになしに、すでに混乱していたガイダンスとカウンセリングをさらに分裂させたのであった。

カウンセラーに提供されるさまざまに競い合うカウンセリング技法の饗宴は、1960年代末には最高潮を迎えていた。行動カウンセリング (Krumboltz 1966; Krumboltz & Thresen 1969; Michael & Meyerson 1965) や実存主義的カウンセリング (May 1961; Van Kaam 1968)、相互阻害による精神療法 (Wolpe 1958)、リアリティセラピー (Glasser 1965)、ゲシュタルト療法 (Perls 1969)、理性感情療法 (Ellis 1967)、カーカフ療法 (Carkhuff 1967) その他さまざまな精神分析的応用療法 (Hummel 1962; King 1965) を含むカウンセリング技法の訓練過程が大学やカウンセラー団体の養成課程やワークショップ、現職研修課程で受けることができるようになった。諸技法のこのような多様性が溢れかえるほどであったので、広い意味でのガイダンスとカウンセリングの目的を達成するための手段そのものが、自ら新しいイデオロギーとして本来の目的と競合するようになった。

少なくとも、手段と目的のこうした混同が自らの目指すものを見失わせることに手を貸したのである。同時に、このように技法に夢中になってしまったことがカウンセラーの専門化をいっそう進め、目的の共有性を拡散させてしまったのだ。

1970年代にカウンセラーが直面した最終的な問題は、全体を統合する目的と方向性であった。専門職としてのガイダンスとカウンセリングはグランツ(1965)が「難破船の漂流物」とますます似てきていると見なしたような様相を呈している。同じような意味で、ティーデマンとフィールド(1965)も、近年に見られる方法論を過剰に強調する風潮がこの専門職を共通の目的意識とは別の方向に追いやっており、むしろ、カウンセラーをささいな技法の改善に狂奔する技術屋にしているのではないかと疑問を呈している。

### おわりに：ガイダンスの70年代とこれから

ほぼ30年前、ロバート・マシューソンRobert Mathowsonが記していることであるが、歴史的に見て、ガイダンスとカウンセリング分野を貫いているものは、伝統的な哲学と教育学や心理学、民主的統治の基礎となっている政治的公式、物質科学の諸概念などから借用された不適切な枠組みからの自由を獲得するための探究の営みである(1949 p.73)。

1970年代に向き合う「ガイダンスとカウンセリング」問題をみると、この分野が求めてきた幅広く統合的な体系への追求が弱まってきたように思われる。'70年代にわれわれが見つめるものは、偉大なアメリカ社会の衰退であり、また、国民を深刻な分断に導いた外国との戦争の終結、大統領と副大統領の罷免<sup>8</sup>につながった政府に対する幻滅と不信感の広がり、失業と経済不振問題、マイノリティーと女性たちの権利に対する運動の高まり、既成の制度や権威に対する無関心が多くの人々の間にますます広まっていることなどである。1960年代のように、これらの多様な社会現象はわれわれの分野を強力に専門化と細分化へと押しやり、対象者を特定化し介入するという個別対処モード選択の道を歩ませているのである。

ガイダンスとカウンセリングが未来に向かうにあたり、アメリカ人事・ガイダンス協会の会員急増と内部組織の複雑化によって、われわれ全員の中心的課題となっているものにカウンセリングに携わる人々が正面から取り組まないということがあってはならない。われわれの組織の規模と能力が向上するにつれ、対象となる人々も増えまたその期待も高まっているのである。その期待に対してわれわれはこれまで絶えず改善充実を図ってきたわれわれの知識・技法の総体によって応えようとしてきた。とはいえ、われわれは、「社会は、専門化が総合的な思考を妨げるということを理解せずに、専門化は成功の鍵であるという考え方に立って動いている」というフューラー Fuller (1969 p.13) の警告に注意を払ってこなかった。

前向きに考えれば過去を振り返った場合より、われわれの専門分野はよくやっている

といえるだろう。目的に関するしっかりした合意のもとで会員を統合する「システムを  
求める」ことを必要としている。このメッセージは、おそらくわれわれが過去から受け  
継ぐもっとも重要な遺産であり、未来に向けての極めて重要なミッションを表したもの  
であろう。

#### 参考文献<sup>9</sup>

- Allport, G. W. *Personality and social encounter*. Boston: Beacon,1960.
- Allport, G. W. *Personality: A psychological interpretation*. New York: Holt,1937.
- Arendt, H. *Between past and future*. New York: Viking,1961.
- Armor, D. J. *The American school counselor*. New York: Russell Sage Foundation,1969.
- Barry, R. and Wolf, B. *Modern issues in guidance-personnel work*. New York: Teachers  
College Press,1957.
- Bloom, B. S. *Stability and change in human characteristics*. New York : John Willey, 1964.
- Bloomfield, M. *Readings in vocational guidance*. Boston: Ginn, 1915.
- Bordin, E. S.; Nachmann,B.; & Siegal,S.J. An articulated framework for vocational  
development, *Journal of Counseling Psychology*,1963,10,107-117.
- Brewer, J. M. *Education as guidance*. New York; Macmillan,1932.
- Brewer, J. M. *History of vocational guidance*. New York ;Harper & Brothers, 1942.
- Bruner, J. S. *The process of education*. Cambridge; Harvard University Press, 1960.
- Carkhuff, R. R. *The counselor's contribution to facilitative processes*. Urbana,III  
.:Parkinson,1967.
- Coleman, J. S. *The adolescent society*. New York: Free Press, 1962.
- Conant, J. B. *Slums and suburbs*. New York: McGraw-Hill, 1961.
- Conant, J. B. *The American high school today*. McGraw-Hill, 1959.
- Cremin, L. A. The progressive heritage of the guidance movement. In R.L.Mosher, R.F.  
Carle, and C.D.Kehas (Eds.), *Guidance: An examination*. New York: Harcourt, Brace &  
World, 1965.
- Cremin, L. A. *The transformation of the school*. New York: Alfred Knopf, 1961.
- Davis, A. *Psychology of the child in the middle class*. Pittsburgh: University of  
Pittsburgh Press, 1960.
- Davis, J. *Vocational and moral guidance*. Boston: Ginn, 1914.
- Edwards, N., & Richey, H. G. *The school in the American social order*. Boston: Houghton  
Mifflin, 1947.
- Ellis, A. "Rational-emotive psychotherapy." In D. S. Arbuckle (Ed.), *Counseling and*

- psychotherapy. New York: McGraw-Hill, 1967.
- Erikson, E. H. *Childhood and society*. New York: W.W. Norton, 1950.
- Erikson, E. H. *Identity and the life cycle*. Psychological Issues, Monograph I. New York: International Universities Press, 1959.
- Freud, A. *The ego and the mechanisms of defense*. London: Hogarth Press, 1937.
- Fuller, R. B. *Operating manual for spaceship earth*. New York: Simon and Schuster, 1969.
- Gardner, J. *Excellence*. New York: Harper, 1961.
- Ginzberg, E. *Career guidance*. New York: McGraw-Hill, 1971.
- Ginzberg, E.; Ginzberg, S.; & Herma, J. *Occupational choice : An approach to a general theory*. New York: Columbia University Press, 1951.
- Glanz, E. C. *Foundations and principles of guidance*. Boston: Allyn & Bacon, 1964.
- Glasser, W. *Reality therapy*. New York: Harper, 1965.
- Good, H. G. *A history of American education*. New York: Macmillan, 1956.
- Goodman, P. *Growing up absurd*. New York: Random House, 1960.
- Harrington, M. *The other America*. Baltimore: Penguin, 1962.
- Havighurst, R. J. *Developmental tasks and education*. New York: Longmans, Green, 1952.
- Holland, J. L. A theory of vocational choice. *Journal of Counseling Psychology*, 1959,6,35-45.
- Hollingshead, A. B. *Elmtown's youth*. New York: John Wiley, 1949.
- Horney, K. *The neurotic personality in our time*. New York: Norton, 1937.
- Hummel, R. Ego counseling in guidance: Concept and method. *Harvard Educational Review*, 1962, 32, 463-482.
- Hunt, J. McV. *Intelligence and experience*. New York: Ronald, 1961.
- Inhelder, B., & Piaget, J. *The growth of logical thinking from childhood to adolescence*. New York: Basic Books, 1958.
- Kardiner, A. *The individual and his society*. New York: Columbia University Press, 1939.
- Katz, M. Theoretical foundations of guidance. *Review of Educational Research*, 1969,39, 127-140.
- Kehas, C. D. Theoretical formulations and related research. *Review of Educational Research*, 1966, 36, 207-218.
- King, P. T. Psychoanalytic adaptations. In B. Stefflre (Ed.), *Theories of counseling*. New York: McGraw-Hill, 1965.
- Kitson, H. D. Suggestions toward a tenable theory of vocational guidance. In Meyer Bloomfield (Ed.), *Readings in vocational guidance*. Boston: Ginn, 1915.



Kohlberg, L. Moral development and identification. In 62nd yearbook, National Society for the Study of Education. Chicago: University of Chicago Press, 1963, 277-332.

Krumboltz, J. D., & Thoresen, C. E. *Behavioral counseling: Cases and techniques*. New York : Holt, Rinehart and Winston, 1969.

Krumboltz, J. D.(Ed.). *Revolution in counseling*. Boston: Houghton Mifflin, 1966.

Lasch, C. *The new radicalism in America: 1889-1963*. New York: Vintage Books, 1965.

Linton, R. *The study of man*. New York: Appleton-Century, 1936.

Lynd, R. S., & Lynd, H. M. *Middletown*. New York: Harcourt Brace, 1954.

Maslow, A. *Toward a psychology of being*. New York: Van Nostrand, 1968.

Mthewson, R. H. *Guidance policy and practice*. New York : Harper, 1949.

May, R. *Existential psychology*. New York: Random House, 1961.

McClelland, D. C. *The achieving society*. Princeton, N. J.: D. Van Nostrand, 1961.

Michael, J., & Meyerson, L. A behavioral approach to counseling and guidance. In R. L. Mosher, R. F. Carle, & C. D. Kehas (Eds.), *Guidance: An examination*. New York: Harcourt, Brace and World, 1965, 24-48.

Miller, C. H. *Foundations of guidance*. New York: Harper and Brothers, 1961.

Miller, C. H. Vocational guidance in the perspective of cultural change. In H. Borow (Ed.), *Man in a world at work*. Boston: Houghton Mifflin, 1964.

Mumford, L. *The city in history*. New York: Harcourt, Brace and World,1961.

Munsterberg, H. *Psychology and industrial efficiency*. Boston: Houghton Mifflin, 1913.

Murray, H. A. *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press, 1938.

Norris, W.; Zeran, F. R.; & Hatch, R. W. *The information service in guidance*. Chicago: Rand McNally, 1960.

Parsons, F. *Choosing a vocation*. Boston: Houghton Mifflin, 1909.

Peck, R. F., & Havighurst,R. J. *The psychology of character development*. New York: John Wiley, 1960.

Perls, F. *Gestalt therapy*. Lafayette, Cal.: Real People Press, 1969.

Piaget, J. *The origins of intelligence in children*. New York: International Universities Press, 1952.

Proctor, W. M.; Benefield, W.; & Wrenn, C. G. *Workbook in vocations*. Boston: Houghton Mifflin, 1931.

Riesman, D. *The lonely crowd*. New Haven: Yale University, 1950.

Roe, A. *The psychology of occupations*. New York: John Wiley, 1956.

Rogers, C. R. *Client-centered therapy*. Boston: Houghton Mifflin, 1951.

Rogers, C. R. *Counseling and psychotherapy*. Boston: Houghton Mifflin, 1939.

- Rogers, C. R. *On becoming a person*. Boston: Houghton Mifflin, 1961.
- Rogers, C. R., & Dymond, R. F. (Ed.). *Psychotherapy and personality change*. Chicago: University of Chicago Press, 1954.
- Sherif, M. *The psychology of social norms*. New York: Harper, 1936.
- Shertzer, B., & Stone, S. *Fundamentals of guidance*. Boston: Houghton Mifflin, 1971.
- Sprinthall, H. A. *Guidance for human growth*. New York: Van Nostrand, Reinhold, 1971.
- Sullivan, H. S. *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: W.W. Norton, 1953.
- Super, D. E. *The dynamics of vocational development*. New York: Harper and Brothers, 1942.
- Super, D. E. *A theory of vocational development*. *American Psychologist*, 1953, 8, 185-190.
- Super, D. E. Transition: from vocational guidance to counseling psychology. *Journal of Counseling Psychology*, 1955, 2, 3-9.
- Super, D. E. Vocational development: The process of compromise or synthesis. *Journal of Counseling Psychology*, 1956, 3, 249-253.
- Tiedeman, D. V., & Field, F. L. Guidance: The science of purposeful action applied through education. In R. L. Mosher, R. F. Carle, & C. D. Kehas (Eds.), *Guidance: An examination*. New York: Harcourt, Brace and World, 1965, 192-213.
- Tiedeman, D. V.; O'Hara, R. P.; & Mathews, E. Position choices and careers: Elements of a theory. *Harvard Studies in Career Development*, Number 8. Cambridge: Harvard University School of Education, 1958.
- Vam Kaan, A. *The art of existential counseling*. Wilkes-Barre, Pa.: Dimension Books, 1968.
- Warner, W. L. The society, the individual, and his mental disorders. *American Journal of Psychiatry*, 1937, 94, 275-284.
- Warner, W. L.; Meeker, M.; & Ellis, K. *Social class in America*. Chicago: Science Research, 1955.
- White, R. W. Competence and the psycho-sexual stages of development. In M. Jones (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1960, 97-141.
- White, R. W. *Lives in progress*. New York: Dryden Press, 1953.
- Williamson, E. G. *Vocational counseling*. New York: McGraw-Hill, 1965.
- Wolpe, J. *Psychotherapy by reciprocal inhibition*. Stanford, Cal.: Stanford University Press, 1958.
- Wrenn, C. G. *The counselor in a changing world*. Washington, D. C.: American Personnel and Guidance Association, 1962.

Wylie, R. C. *The self concept*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1961.

## 注

- \*1 訳注：本論文は、Personnel and Guidance Journal,1977,55,288-295に掲載。なお、本誌は現在the Journal of Counseling & Development (JCD) と改称されている。
- \*2 原注：マサチューセッツ州ブルックライン市公立学校勤務。本誌Personnel and Guidance Journalの年次特集で、われわれの職業の歴史的発展が見落とされるとしたら画竜点睛を欠くというべきである。本誌は、この分野が生んだ最も優れかつ多産な書き手であるロジャー・オーブレイに、「ガイダンスとカウンセリングの分野の現在はその歴史的展開の中でどう位置づけられるのか」と尋ねた。オーブレイの答えは、ここに見るように学究的なものであるが退屈なものでは決してない。著者は、ガイダンスとカウンセリングの歴史を、世紀の転換点におけるその最初から複雑で流動的な現在までにわたって繙いている。おそらく、本論文にとって鍵となるものは、彼の次のような言葉にあるのだろう。「前向きに考えれば過去を振り返った場合より、われわれの専門分野はよくやっているといえるだろう。」
- \*3 訳注 1854年11月14日生、1908年9月26日死去。享年53歳。パーソンズは幼い頃から知的才能に優れ、15歳でコーネル大学に入学し、3年後に土木工学civil engineeringの学士号を取得して卒業した。1881年にはマサチューセッツ州で法律家の資格を取得し、ボストン大学、カンザス州立農業大学で法学を教えた。進歩主義の時代の波の中で彼は社会批評家として活躍し、多数の著書や記事を書いた。本文にあるように職業指導運動の父として知られているが、それにとどまらない多彩な才能を発揮し活躍した人物である。(英語版WIKIPEDIA, Frank Parsonsの項 [https://en.wikipedia.org/wiki/Frank\\_Parsons\\_\(social\\_reformer\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Frank_Parsons_(social_reformer))、2021.01. 29. 閲覧。
- \*4 訳注：原語はvocational education 。
- \*5 訳注：第一段階と第二段階で得られた自己理解と仕事理解についてその相互の関連について考察し一定の結論を得ること。
- \*6 訳注：正しくは、1957年10月4日のソ連による人類初の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げ成功のこと。この成功の報により、アメリカ合衆国を始めとする西側諸国の政府や社会に自国の科学技術やその教育の優位に対する衝撃や危機感が走った。
- \*7\* 訳注：American Personnel and Guidance Association の略称。現在はthe American Counseling Associationと改称。
- \*8 訳注：正確には、ウォーター・ゲート事件で告発を受けていたニクソン大統領が罷免の可能性が決定的になったので自ら辞任したこと。さらに、辞任に先立ち評判の悪かったアグニュー副大統領を州知事時代の収賄容疑で解任し、後任にジェラルド・フォア

ドを任命し、ニクソン辞任後フォードが大統領に昇格したことを指す。

- \*9 訳注：参考文献の表記については、本紀要で表示法が定められているが、ここでは著者の表示に従った。